

# 聴講生 募集

学びたい講義を一つだけ、1日だけなら参加してみたい。  
そんなご希望にお応えします。  
好きな講義(日)を選んで聴講することができます。

平成30年度 はびきの市民大学

## オペラを愉しむ ～時代を超えた共鳴～



モーツァルトのオペラに現代の私たちがなぜ共鳴するかについて考えます。また、彼のオペラを強く意識したR.シュトラウスのオペラ「ばらの騎士」と比較検討します。最終講義では、本学新進気鋭のソプラノ歌手によるオペラ・コンサートをお楽しみください。

水曜日・15時00分～16時30分

1	1/9	モーツァルトと同時代の古典派オペラ	大阪音楽大学 講師 村井晶子
2	1/16	モーツァルトの初期のオペラ	
3	1/23	「フィガロの結婚」隠れたプロット	
4	1/30	「コジ・ファン・トゥッテ」現代人への問いかけ	
5	2/6	「ばらの騎士」モーツァルトへのオマージュ	
6	2/13	まとめ；オペラ・コンサート	大阪音楽大学 講師 村井晶子 ソプラノ：長谷川紗希 ピアノ伴奏：新林れん

場 所 羽曳野市立生活文化情報センター(LICはびきの) 内施設  
 受講料 1講義につき800円(当日支払)  
 申込期間 当該講義日の1週間前～前日まで ※定員に達し次第締め切りとなります。  
 申込方法 来館・電話・FAX  
 対 象 市内・市外を問わず、どなたでもお申し込みできます。  
 ※障がいへの配慮が必要な場合は事前にご相談ください。

はびきの市民大学

〒583-0854 羽曳野市軽里1-1-1 LICはびきの内

TEL 072-950-5503・FAX 072-950-5650

事務室時間 9時00分～17時30分 ※閉室は祝日・振替休日・年末年始



主催/羽曳野市

取得した個人情報は、イベントの管理に関する目的以外には利用いたしません。羽曳野市個人情報保護条例(平成12年羽曳野市条例第43号)に基づいて適切に管理いたします。

## オペラを愉しむ～時代を超えた共鳴～

第1講義	モーツァルトと同時代の古典派オペラ
<p>モーツァルトのオペラを検討する前に、モーツァルトと同時代のオーストリアのオペラの状況を概観する。そこからは、サリエリやハイドンなどの宮廷や有力貴族の専属作曲家と、イタリア出身でヨーロッパ諸国に企画を持ち込む作曲家の、2つのタイプの作曲家像が浮かび上がる。また、作品を分析することで、これらの作曲家の作曲手法、ひいては聴衆に受け入れられた作品の特徴を明らかにする。</p>	
第2講義	モーツァルトの初期のオペラ
<p>モーツァルトが11歳の若さで作曲した初めてのオペラ3作品を紹介し、それらの作品にすでに非凡な才能が見え隠れし、この若さでモーツァルトがオペラの作曲技法をすでに修得していたことを明らかにする。次に、ウィーンに定住し、宮廷へのアプローチを開始してからはじめての完成に至ったオペラ作品「後宮からの誘拐」を検討し、明確なパトロンを持たないフリーランス作曲家としてのモーツァルトの困難な道を概観する。</p>	
第3講義	「フィガロの結婚」隠れたプロット
<p>「フィガロの結婚」をボーマルシェ三部作の原作の視点から読み解く。特に伯爵夫人(ロジーナ)とケルビーノに関する、将来まで見通した演出について検討し、この作品のプロットの奥深い点を明らかにする。このように検討することで、主要な登場人物に限らず、脇役にも豊かな肉付けがなされていることも明らかになり、現代の演奏では省略されることの多い2つのアリア(マルツェリーナ、ドン・バジリーオ)の意義についても考える。</p>	
第4講義	「コジ・ファン・トゥッテ」現代人への問いかけ
<p>コジ・ファン・トゥッテは、単なるドタバタ喜劇ではない。この作品が問いかけているものを、2つの視点から検討する。一つは、トルコというオーストリアにとって外の世界の認識についてであり、もう一つは、フィナーレが現代人に問いかけるものである。作曲当時と現代の両方の視点での、表向きの倫理観や人間観と、本音のそれらとの間の微妙な取り合わせが、実際のそれぞれの公演の演出に反映されていることを理解する。</p>	
第5講義	「ばらの騎士」モーツァルトへのオマージュ
<p>モーツァルトオペラをオマージュしたとされる20世紀初頭にリヒャルト・シュトラウスが作曲した「ばらの騎士」を、モーツァルトオペラ(とりわけフィガロの結婚)の視点から検討する。そこからは、円熟したオペラ・ブッフアの構成要素であるズボン役、入れ替え、典型的な性格の登場人物などが、オペラ・ブッフアの構成や進行に大きな役割を果たしていることが明らかになる。</p>	
第6講義	まとめ：オペラ・コンサート
<p>四大オペラを始めとする数々のモーツァルトの珠玉のオペラ作品が生み出された背景には、フリーランス作曲家としての苦難があった。そのような苦難があったからこそ、作品に深みが増し、現代でも頻繁に上演され、新しい視点を問いかけ続ける作品になったことについてまとめる。オペラ・コンサートでは、大阪音楽大学の新進気鋭の歌手による、バロックオペラからイタリア・オペラに至る、アリアの数々をお楽しみいただきたい。</p>	